



第31回

女子プロゴルフのパイオニア

樋口久子

higuchi hisako

「チャコ」の愛称で現役時代に親しまれた樋口久子。

日本女子プロゴルファーの第1期生。そして日本人女子プロゴルファー初のアメリカツアー参戦など、常に日本人女子選手のバイオニア的存在だった。

50歳で現役を引退すると日本女子プロゴルフ協会会長に就任する（現在は相談役）など、ゴルフの普及発展に身を粉にしている。

2016年リオデジャネイロオリンピックでは、いよいよゴルフが正式競技に採用される。ゴルフ界のレジェンドとして今後、その活躍がますます期待される樋口さんに、女子プロ創成期から現在に至るまでのお話を伺った。

聞き手／山本浩 文／白鬚隆幸 構成・写真／フォート・キシモト

文化功労者に選ばれ 新たな気持ちに

—— 文化功労者の受賞おめでとうございます。ありがとうございます。ゴルフ界では初めてということで、自分でも驚いており、身に余る光栄です。今後の日本のゴルフ界はもちろんのこと、スポーツ界発展のためにも頑張っていかなければいけない、と思っております。

—— これまで日本のスポーツ界では王貞治さん、岡野俊一郎さんなど、日本のスポーツを引っばって来られた方が受賞されています。スポーツ界の女性では初めてのことで、大変素晴らしいことですね。今はプロゴルフ協会の相談役ということで毎日精力的にご活躍のようですね。お陰さまで忙しくさせていただいております。



陸上競技の選手として スポーツの世界へ

—— さて生い立ちのころからお話を伺いたいのですが、埼玉県の川越の出身ということですね。子どものころはお転婆娘でんぱ娘だったのですか？

二面性を持っていましたね。子どものころは、男の子と遊んでいたことも多かった。かけっこしたり、石けりしたり、そういう程度のことですけど。当時は家の近くで遊ぶくらい。うちの祖母は、お針の先生で、昔のことですがお弟子さんを取っていたくらいですので、うちの母も商売ができるほどの腕前だった。そういうのもちよっと受け継いでいて好きなのかなと思います。高校のときには、自分でスカートを縫いましたし、刺繍なんかコツコツやるのも好きでした。

—— いつごろからスポーツに目覚められたのですか？

中学校では陸上競技部に入り80mハードルをやっていました。その陸上競技を伸ばそうとして二階堂高校に進学するのですが、川越から通うのが遠くて、世田谷に住んでいた姉のもとから通学することになりました。それで単身、川越から東京の世田谷に引っ越したわけですけど、近所に友だちがいなくて土曜、日曜日になるとゴルフ場に勤めていた姉にくっついてゴルフ場に行っていました。



高校生時代(左)クラスメイトと共に



成人式(川越カントリークラブで)

—— 高校生のころですか？

それがゴルフをするきっかけで、高校卒業時に、進路を決めるときに「あなたはスポーツが好きなのだからゴルフをやってみたら」と姉に薦められて、2、3年やってみて駄目だったら洋裁の道に進み直せばいいや、ということで軽い気持ちでゴルフを始めました。

ゴルフとの かいこう 邂逅

—— では、高校の段階で陸上からゴルフの方へ移って行ったような感じですか？ それはお姉さまの関係が強いわけですね。ご家族は大家族ですよ。

8人兄弟です。女性が6人、男が2人。私は下から3番目です。

—— 他のご兄弟でゴルフに関わりがあった方は？

先ほど話した長姉がゴルフ場に勤めていた他は、すぐ上の姉がプロゴルファーの方と結婚しました。結構ゴルフには縁がありましたね。

—— ご家族は裁縫の道に進めとか言われなかったのですか？

1968年 川越カントリークラブで練習に励む

8人兄弟の下から3番目ですから、何も言われませんでしたね。姉の勤めていたゴルフ場は東京の瀬田にあって、今は砧公園になっていますが、当時は9ホールコースでした。

そこで中村寅吉先生がヘッドプロをしていて、「プロになりたいのだったら俺のところ来い」と言われて、川越カントリークラブの社長もされたので、そこへ就職しました。それで研修生からプロになるわけですが、また親元からゴルフ場に通うわけです。

—— 二階堂といえば上まで行けるシステムですよ。

日本女子体育大学の系列ですからね。進学するか就職するか、ゴルフの道に進むか、という感じでした。「ゴルフやってみれば」と言われて、「じゃあゴルフやってみる」ということですね。まだ若かつ

たので、駄目だったら他の道を選ばばいい、なんて軽い気持ちでしたね。

—— それで初めて中村先生にお逢いになったときのことは憶えていますか？

砧のときですが、怖い、という印象しかありません。当時は上下関係の厳しい時代ですから。男子のプロなんかでも手取り足取り指導してもらうなんてことはない。「目で見て盗め」という時代でした。でも、私は川越カントリークラブに入って先生に一から教えていただきました。

—— 最初のころの中村先生の教え方はどんな感じでしたか？



グリップの握り方から始まり、すべてのことを教えていただきました。砧のときは遊びでやっていたので、ボールは打てましたが、先生から指導を受けるということはありませんでした。初めて中村先生から指導を受けたのは18歳のときですね。

—— 中村先生との1週間のスケジュールは、どんな具合でしたか？

川越カントリークラブに就職し、練習場勤務にさせていただいたので、早朝にお客さんがスタートしてしまうと誰もいなくなります。それから自分の時間で、1日中でもボール

を打っていられるわけです。プロテストに合格しても、しばらくはそんな感じでした。

日本初の女子プロの誕生

—— 相当長い時間、練習ができるわけですね。しかも環境はいいし、お金もかからない。しかもお給料がもらえるという。

もちろん、このうえなく毎日が幸せでした。当時は女子の協会もなかったの、中村先生にお願いして、男子の協会の中に女子部を作っていただきました。それで川越カントリークラブで1967年に初めて女子のプロテストが開催されました。私は高校を卒業してから2年くらい経っていた。昭和42年ですね。

—— そのプロテストというのは中村先生が尽力されて開催されたということですか？

そうです。したがって会場も川越カントリークラブでした。受験したのはゴルフが好きな女子26名で、私は18ホールを73で回ってトップ合格しました。今みたいに特に決まったルールはなく、83くらい叩いた子もいたけど、全員合格しました。

—— そのプロテストが行われる前は、女子の試合はどうしていたのですか？

自分たちの同好会みたいな感じで、毎月集まって試合をやっていました。世間に認めてもらえるようにならないといけなく、というので毎月2ラウンド回っていました。

—— 賞金も何もないですね。

賞金はないんですけど、その当時、女子プロを応援してくださったファンの方々が「じゃあ10万円出してあげるから皆で競技をしなさい」と、そんな感じでした。

—— そして最初にプロテストに合格した方々が、軌道に乗せ始めるのですね。

すぐには軌道には乗りませんでした。やっとな産声をあげたばかりでしたから、世間の人たちに認知されないうちに早く身につけなければならぬと思い、たくさんボールを打ちました。あまり考えずに普通にスイングしていたのですが、中村先生は、身体が小さいので自分で常にボールを遠くに飛ばすのは、どうしたらいいのか、いつも考えていました。だから、こうやってみる、ああやってみる、ということ



日本女子オープンを連覇(TBS越谷GC)

ます。私の月給が1万3500円でしたから、月給の約10倍でした。

—— プロテストができ、選手権とかが始まったわけですが、どういう影響ができましたか？

そのころの風潮は、「女がプロになってどうするの」と言われました。

練習嫌いを克服する

—— 陸上競技の練習が好きでないとされていたそうですが、ゴルフの練習はどうでしたか？

中学校のとき、陸上の練習をさぼったら、顧問の先生が母のところに来て「優秀なのだから練習に来れば伸びる」と言ってくれたのです。それを聞いて、「これはいけない。練習というのは人のためにするのではなく自分のためにするものだ」と気がついたのです。このことがあったのでゴルフは徹底的に練習しました。

—— その先生が来てくれていなかったら大変でしたね。

その中学の先生の言葉がきっかけでした。ゴルフは中村先生に師事しましたが、頭で理解する人はいっぱいいるが、私は一度教わったことを忘れないうちに早く身につけなければならぬと思い、たくさんボールを打ちました。あまり考えずに普通にスイングしていたのですが、中村先生は、身体が小さいので自分で常にボールを遠くに飛ばすのは、どうしたらいいのか、いつも考えていました。だから、こうやってみる、ああやってみる、ということ

毎日、恩師を道端で待つ

—— プロになられてからの練習にはどう取り組まれましたか？

テストはトップ合格しましたが、そのまま行けるとは思いませんでした。幸い私には先生がいて、すぐに見ていただける。先生は東京に住んでいらっ



師・中村寅吉プロと

しゃって、川越に来るときは奥さまから電話があって「チャコちゃん、あと30分くらいで着くわよ」って連絡がある。だから、時間になると決まった道端に立って待っている。すると先生が途中、車で捨ててくださる。それで一緒に川越カントリークラブに行って、指導を受ける。先生がお宅に帰るとき、「もう帰るぞ、いい加減にしろ」って言われるくらいまで練習をやっていました。

—— そうすると手のひらには豆ができるでしょうね。もちろんできました。グリップを握っていて、一度手を放すと痛いのでずっと握ったままでいました。だから休憩が嫌で、休むのは本当にお昼休みくらいでした。

—— それで辞めたいとか、あるいはケガをしたとかはなかったのですか？

いいえ。私はケガはしなかったです。これは親に感謝です。スイングを続けていても痛いところがまったくない。本当にいいスイングを教えてもらったなと思っています。ボールも曲がりませんし。

—— 芯がありながら柔らかい、という印象です。中村先生に車で送り迎えしていただいたそうですが、車中で中村先生とどのような会話をされましたか？

怖い先生だから、あまり喋れない。ただ練習で教えていただくだけで、車に乗ると疲れているので眠くなってしまいます。そうすると「俺の車に乗って眠るのはお前だけだ」と怒られていました。

ミズノと契約、先が開ける

—— 肝っ玉が据わっている証拠ですよ。そして次はミズノの契約選手になるのですね。

川越カントリーには5年間お世話になりました。お隣のコースの嵐山カントリーに佐々木マサ子さんがいて親交がありました。彼女がミズノの所属プロだったので、中村先生も先々のことを考えてくれて、海外に行くなら企業と契約していた方がいいだろうと、ミズノにお願いして、私も契約することになりました。

—— もちろんミズノさんも樋口さんが第1回からタ

イトルを取っていることを見ているわけですよね。

そうですね。初年度には女子プロ選手権とTBS女子オープンの大大会しかありませんでしたが、幸い2大会とも優勝しました。当時はプロが少なくてアマチュアの人の方が上手いのです。そのころはプロが40人くらいで、アマチュアが50人くらい出していました。アマチュア選手の方が多かったです。

—— 2大会を制覇されたということは、技術だけでなく精神的にも強かったのでしょうか、「プロだからアマチュアとは違うのだ」ということを意識されましたか？

アマチュアはお金を払ってプレーするけど、プロはお金をもらってプレーする、という感じでしょうか。プロは高い技術を見せないといけません。

—— それからタイトルを毎年取って行かれるわけですが、迷いかたためらいとかはなかったのですか？ 迷いというのは、アメリカのツアーに行ってからですね。“迷い”というか“自問自答”です。

日本人初、佐々木選手と アメリカツアーに挑戦

—— アメリカに行かれたのは1970年ですね。

そうです。アメリカの選手は基本的に忠実でフォームも綺麗。私みたいに上体を大きく動かしてスイングする人は少ないですね。だから、いつも見ていて「私は、これでいいのかな」と自問自答です。でもアメリカの選手は飛ぶけど曲がるな、と。私は、それほど飛ばないけど曲がらない。ゴルフって、どちらが有利なのだろう、と。でも、私は先生がついているのだから、これでいい。先生は練習して見えない足の所まで指摘される。たとえば足の指ですよね。スパイクを履いていても「おまえ、この足の指にも力を入れろ」と言われる。

—— そこまで指摘を受けて、どこがどう変わったのですか？

下半身が強くなりました。動きがスムーズになっていく。

—— 当時はタイトルを順調に取って行く、そのためには、身体の特徴とか栄養とか考えましたか？



ゴルフ場



アメリカツアーに参加していたころ
右は佐々木マサ子

そんなの全然考えないですよ。今の選手は、それこそ栄養士はついてはいるは、トレーナーだのマネージャーだのついてはいますよね。私たちのときは、全部自分1人でやるのですから。ただアメリカのツアーに行ったときは、バランスよく栄養を摂ろうと思いましたね。毎日お肉だけでなくサラダも食べるとか。今日、お肉を食べたら明日は魚を食べようとか。そういうバランスは考えました。でも、嫌いなモノは、あまりなかった。

当時の国内女子プロの状況

—— 当時の新聞などを見てもみると、賞金も50万円くらいだったようですね。それから少し経ってから副賞に車がつくようになった。

最初のころは洗濯機とかね、それもゴムのローラーの脱水機つき洗濯機。そういうのが副賞につきました。冷蔵庫もありました。それから何年か経ってから車、それも最初のうちは軽自動車でした。

—— 基本的にはプロになると自分のペースで生活できるわけですね。

そうですね、当時は女子の試合が、そんなに多くありませんでした。ゴルフ場に所属していると、出場できるのが2、3試合しかありませんので、それを目標にして練習していたわけです。

アメリカツアーへ本格的な参戦

—— それで、アメリカツアー参戦があるのですね。これは何が引き金になったのですか？

日本にアメリカのプロ選手が来てエキシビジョンをする予定が、風邪ひいてキャンセルになってしまったのです。それで、所属先のミズノに「日本でアメリカ人選手と試合できないならアメリカに行かせてください」とお願いしました。アメリカ選手は、どれくらい飛ばすのか、どんなゴルフをするのか、ということに興味がありました。それでアメリカのツアーはどんなものか、何人くらいで試合をしているのか、というような情報を収集しました。私は、10試合に出場することを目標として4月から6月まで3カ月間アメリカに行っていたのですが、それはなぜかという毎年7月に日本女子プロ選手権の



日本女子オープンを連覇(TBS越谷GC) 表彰式

予定が入っていたからです。だから帰って来るのは当たり前という感覚でした。

—— 当時は、佐々木さんとお2人でツアーを回られたのですか？

佐々木さんと通訳の方と3人ですね。試合を目標に行くので、やっぱり色々な雑用は避けたい。試合に集中したいので、通訳の方に来ていただいて、飛行機、ホテルの予約とか、レンタカーを借りる作業をやってもらっていました。

驚愕の日米ゴルフ環境の差

—— アメリカ選手のゴルフへの取り組み方に関しては、どう思われていましたか？

当時、環境がまったく違うのに驚きました。日本は練習場もマットの上だし、アプローチも芝生が痛むからだめ。そういう点では、アメリカは芝生の上でいくらでもボールを打てる。やる気になれば、アプローチもパットも好きなだけ練習できる。その点がすごいなと思いました。

—— それから選手の責任感、練習の態度はどうでしたか？

もう競争が激しいですから、やらざるを得ないので、いろいろな機械を使うとかして、練習はすごくやっていましたね。ただ、その当時はアメリカにも専門のコーチとかは少なく、数人しかいなかった。

—— トーナメントにむかう選手の気持ちとか、戦いぶりはどうでしたか？

やはり選手の層が厚いので競争が激しいです。



1976年 コルゲート・ヨーロップ・オープン



海外ツアーで活躍



1988年2月
愛娘久仁子ちゃんを出産



グリーン上でのパッティング

ワンストロークの差で賞金が倍くらい変わるので。そこでワンストロークの重みというモノを覚えめました。私たちはミズノというスポンサーがついていましたから移動なんかも飛行機が使えるし、車の移動もレンタカーで1時間も走ればよかったです。アメリカの選手は自分の車で全行程移動するわけです。それも6時間、7時間も車で移動してくるのでからタフですよ。

結婚を機に、女子選手の新しい道を開く

—— そしてご結婚されますよね。

26歳のときです。ミズノの先々代の社長をしてもらった水野健次郎さんに仲人をしていただきました。アメリカのツアーには、ジュディ・ランキンというトッププレーヤーがいて、彼女のご主人が子どもさんを背負って、奥さんのゴルフバッグをカートに積んで、一緒にラウンドしていました。移動もご主人が車を運転している。それを見て「うわー、アメリカって、なんていい国なんだろう。こんなことを日本でやったら、何て言われるだろう」と思いました。でも「ああ、結婚しても出産してもゴルフができるのだ」ということを知ったわけです。結局、アメリカにツアーで10年間行ったのですが、そこでのいろいろなことを経験したことが、その後のゴルフ人生に大変役に立ちました。多くの後輩たちが常に自分の背中を見てついでくるので、その後輩のためにも良いゴルフ人生を続けて行かなければならないと痛感しました。現在では、結婚、出産後もプレーを続ける人が多く出てきています。

苦手のパットを改良。新境地に辿り着く

—— 連覇も何度もされているのですが、スランプみたいなものはなかったのですか？

スランプはありました。でも他の人とは違い大きな波はありませんでした。優勝しても次の日に練習に行っても中村先生に見てもらいました。やっぱりショットが悪いと、グリーン周りからの寄せワンという形が多くなり、それを18ホールやっているとお苦し

いですよね。そういう勝ち方のときは、次の日に練習に行ってもショットの修正をしました。

—— そのアメリカに行ったとき、芝生の違いみたいなものは感じましたか？

その違いでスランプになりました。当時の日本が高麗グリーンで、バリバリの重い芝生でした。アメリカの芝生はガラスのように滑って行く感覚なのです。それでパッティングの病気になりました。1975年ですか。

—— どうやって克服したのですか？

アメリカのツアーから帰って来るのを1週間遅らせてパットだけのレッスンを受けて帰ってきたのです。マレットタイプのパターを選んで、ボールの位置も真ん中に置き、スイングをするだけでクラブがボールを運んでくれる。したがってヘッドはある程度重いものを使う。それで打ち方もまったく変わりました。「ボールを置き、クラブのフェースを決めてから1回ホールを見る。距離を頭の中に入れて、ボールだけ見て打ちなさい。入ったか入らないかは耳で聞いて知りなさい」と言われ、それを毎日ずっと、納得のいくまで3日間やりました。それほど徹底的にやったら、怖くて打てなくなっていたパットが怖くなくなりました。

海外でメジャータイトルを獲得

—— オーストラリアでまず勝たれたのですね。



1977年 全米女子プロ選手権

オーストラリアで1974年に勝って、1975年にスランプに陥って、1976年にイギリスで勝って、そして1977年の全米女子プロ選手権でついにアメリカで勝つことができました。

—— この1977年、1978年あたりのご自分のゴルフは、どう分析されますか？

もう最高ですよ。イギリスで勝ったときも嬉しかったのですが、やっぱり本場のアメリカで勝てたのが嬉しかったです。自分は恵まれている、ラッキー、運が強いと思いました。なんせチャンピオンシップの公式戦で勝てましたからね。しかもパッティングを一番悩んでいた後の優勝ですから喜びもひとしおでした。

全米女子プロ優勝秘話

—— 振り返ってみて、1977年の勝利。あのメジャーの勝利に至るまでのゴルフはどんなものだったのでしょうか。

大会の前の週も最終グループで回っていたのですが、パッティングで潰れてしまいました。だから全米女子プロ選手権では、スコアボードを見ないでプレーしようと思いました。

—— 日本からの取材攻勢はなかったのですか？

そうですね。また、ツアー中は2人でモーターに泊まっていたのですが、その週だけは、新しくできたコンドミニアムの部屋を貸してくれる人がいたのでそこに泊まりました。そこは、まだできたばかりの

家で電話もついていなかったのに、2日目にトップに立っても日本と連絡が取れない。またプレスからの電話も入らなかったの、そういう意味ではプレーに集中できてよかったです。

—— この1977年の勝利は、樋口さんの後の競技人生にどう影響しましたか？

やっぱり何年経っても、メジャータイトルを取っていると云われますからね。スポンサー・トーナメントだと、スポンサーの都合で辞めてしまうこともあります。しかし全米女子プロ選手権は協会が存続する限り未来永劫、続くわけです。そういう重みがありますね。それがメジャーチャンピオンということで、自分の意識も変わりました。

—— その後すぐに日本に戻って優勝されているのですね。

そうですね。アメリカで優勝した後、すぐに日本で試合があったのですが、そのときは大変でしたけどね。アメリカで勝ってきて皆から注目されている。当然、勝って当たり前なのです。だけど、国内は高麗グリーンだから目が強いとわかっていてもパットが思うように打てない。弱気になる。しかし、やっけて行くうちに、もう1人の自分が出て来んです。お前は何かやっているの。アメリカで勝って世界一になったじゃないか。日本で勝てないわけがないだろうと、後ろからもう1人の自分が出てきて発破をかけるのです。それで、なんとかアメリカと日本の両方で選手権を取ることができました。

アメリカツアーに一区切り、国内に力を回す

—— その後のアメリカとの関わりはいかがですか？

1977年に全米女子プロ選手権に勝ったのは、アメリカツアーに参戦して8年目です。9年、10年とツアーに参戦して、マスコミも日本の選手の成績を大きく取り上げてくれるようになりました。その当時、二瓶さんが女子プロゴルフ協会会長をされていて、彼女から「樋口さん、日本にいてくれませんか」と言われました。「日本にいてくれないと、試合がないのよ」と。私がアメリカに行ってしまうと、4月から6月は日本にいませんから、その間は



1977年 日本女子オープン



1977年 全米女子プロ選手権



アメリカから帰国後第1戦、日本女子プロ選手権で優勝
左は岡本綾子



殿堂入りを果たす

スポンサーが見つからない。帰って来ると試合がポチポチ出てくる。それで、翌年から日本に残ることにしたら、春先から夏にかけてもスポンサーがつき、試合が増えました。

—— そのころ日本でライバルになるというか、自分の後を継ぐものと意識したプレーヤーはいましたか？

そうですね、台湾の徐阿玉^{トアギョウ}さん。そして、岡本綾子^{アキコ}さんが出てきたのは、10年くらい後。あの方はソフトボール出身でした。それからですね、ソフトボール出身の選手が多くなったのは。

—— アメリカへの道は樋口さんが開いたわけですからね。その後、日本の選手も随分アメリカに行っています。そして樋口さんは殿堂入りを果たします。

アメリカのツアーに行っているころ、殿堂というものがあるとは知っていましたが、まさか自分が入れるなんて思ってもいませんでした。2003年の6月に情報が入ったのですが、授賞式は秋でした。非常に名誉なことです。

協会会長に就任、 そして若い選手の台頭

—— 協会の会長になられた経緯をお聞かせください。

1997年に私が日本の女子協会の会長になったのは、ちょうど50歳のときです。そういう区切りがあるのですね。ちょうど若い選手が台頭してきた時期でした。その前の会長選挙のときに一度選ばれたのですが、「私、まだプレーしたいから嫌だ」と言って断ったことがあった。だけど50歳になったとき、再び選ばれて、これは断れない、恩返しをしなければいけない、と思ってお引き受けすることになりました。72回も勝たせてもらってゴルフ界にもいい思いをたくさんさせていただいたので、これからは協会の発展のために尽くそうと思いました。ちょうど協会が創立30年を迎えた年でした。それまでは、日本のプロテストを合格しないと日本の試合に出られない、と規則で決まっていたんですが、QTというものを設けて、海外の選手や若い子も参加できるように出場資格を広げました。またアマチュアで

もスポンサーが推薦すれば何試合でも出場できるようにし、そこで優勝したら会員に迎えることにしました。そういう取り組みをした結果、宮里藍さんがツアーに参加するようになり優勝もしてくれました。これも、私は運がいいな、と思いました。改革を打ち出し、その条件をクリアする選手が出てこないという意味がないですから。

先人の偉業を称えるため 日本ゴルフ殿堂を設立

—— 歴史を大切にしなければいけないということで日本プロゴルフ殿堂を設立されたのですね。アメリカの殿堂に自分が入って、日本も歴史を残して行かなければならないと思いました。アメリカは歴史の浅い国ですが、歴史をすごく大切に、パイオニアというものを大事にしてくれます。でも今の日本では若いプレーヤーしか興味がない。昔どんな選手がいたのか知ろうとしていません。まだ殿堂のスポンサーがついてないので、ミュージアムみたいな建物はできないのですが、なんとか表彰だけはして、偉大なプレーヤーの名前を残して行きたいと思っています。

ゴルフのオリンピック 正式競技化に尽力

—— 2016年のリオデジャネイロ大会からゴルフが正式競技になり、2020年の東京大会でもゴルフは実施されます。これで期待も大きくなりました。期待が大きいのはわかります。私は2009年にブ



レゼンテーションでスイスのIOC本部に行きました。オリンピックの正式競技になるためには、各国のゴルフ協会を1つの組織にまとめる必要があり、IGF(国際ゴルフ連盟)というものを作りました。

R&A会長のピーター・ドーソン、アメリカPGAコミッショナーのフィンチャム、副会長のタイ・ボトー、そしてアニカ・ソレンスタム、コリー・モントゴメリーなどが積極的な活動をしており、私も同席してプレゼンテーションもしました。たぶん白人ばかりだったので、東洋人の私も必要とされたのだと思いました。ゴルフは230の国と地域で毎週テレビ放送されているので、そんなことが評価され正式競技になったと思うのですが、とりあえず2大会は実施されることになりました。でも、そこで成功しないと正式競技から外されるということで、大変なのはこれからです。

—— 日本はオリンピックとなると力が入るのですが。

でも、今強い人が出られるかというところでもない。6年後にピークがくる選手を育てなければいけません。現時点でアマチュアの子が有力かもしれない。ただしワールドランキングでポイントを取り、上位に入らないと出場資格が与えられないから、やっぱりプロになって勝っていかないとはいけませんね。東京の時は開催枠があるかもしれませんが、ワールドランキングのポイントの問題ですからね。

—— そのゴルフ界の将来の動向というか、期待することとか。

テニスの錦織圭なんて、凄くないですか。テニスでもあそこまで活躍する選手が出てきているのですから、ゴルフでも不可能ではありません。フィギュアスケートの羽生結弦とか、親が自分の子どもに夢を賭けるのは良いことじゃないですか。もちろん、ゴルフでそういう若い選手が出てくるといいですね。

スポーツ基本法、 スポーツ庁について

—— スポーツ基本法というものが3年前にできて、スポーツをする人の権利みたいなものが書かれている。競技団体も、その権利のために頑張らないといけません。一方では障がい者スポーツにも力を入れたいといけません。やらなくてはならないことが増えてきていますね。

これは、私も勉強しているところですが、スポーツ

庁ができることはいいことだと思います。スポーツ関係、スポンサー関係、官公庁の方は、ゴルフをやる方も多いので、交遊関係を広げ情報を収集していきたいと思います。

—— それこそメディア関係者も多いでしょうね。ゴルフができないと人間じゃないとか(笑)どうでしょう、芝生の上に立っていなくてもゴルフのマインドを大切にされているのでは?自分が守ってきたものとか、どんなことですか?

守ってきたというか、最初にも申しましたが、私はプロ意識が強いですから、今でも「気楽に回って下さい」と一緒にプレーする方から言われても本気になってしまいますね。何度も回れる相手ならともかく、それ1回だけだと変なプレーは見せられないじゃないですか。スコアはしっかり取られているし、だからちゃんとしていなければならないという感じですよ。

—— なるほどね。生来の「負けたくない」という気持ちですね。

勝負に負けたくない、というのは現役時代ですね。今は、それほどではないですが、変なプレーは見せられない、という気持ちはあります。

感動を与えられるような 選手に

—— 若い人に今残しておきたいメッセージがいくつかあれば。

そうですね、スポンサーとファンの方は大切にしなければいけません。常に感謝の気持ちをもつこと。そして、何事にもプロ意識は強く持ってほしいですね。

—— プロは自分のことだけではないですからね。スポーツとは、すごく感動を与えたりとか、人の心を動かすことができるものだと思うのです。そういう点では責任ある行動をとらなければいけない。それなりに努力しなければいけませんね。多くの人に感動を与えられるような選手になってほしいですね。

—— 樋口さんらしい、過去にも未来にも太いものを持った言葉だと思いました。今日は、どうもありがとうございました。



1964年
東京オリンピック開会式



子供たちがスポーツを楽しむ

1901
明治34

英国商人アーサー・ヘスケス・グルームにより4ホールゴルフ場が六甲山上に完成
日本最初のゴルフコースとなる

1924
大正13

神戸・根岸・東京・鳴尾・舞子・程ヶ谷・甲南の7倶楽部により日本ゴルフ協会(JGA)設立

1926
大正15

第1回日本プロゴルフ選手権大会、大阪・茨木にて開催

1942
昭和17

日本ゴルフ協会(JGA)、臨時総会を開催し解散することを決定
大日本体育会の打球部会として発足し、日本ゴルフ協会(JGA)の事業は同部会に引き継がれる

1945 樋口久子氏、埼玉県に生まれる

1945 第二次世界大戦が終戦

1947 日本国憲法が施行

1949
昭和24

関西ゴルフ連盟と関東ゴルフ連盟が発足され、日本ゴルフ協会(JGA)が復活

1950 朝鮮戦争が勃発

1951 安全保障条約を締結

1953
昭和28

讀賣新聞社が全日本女子ゴルフ大会を開催
これが日本女子ゴルフ界、最初の全国規模の大会となる

1955 日本の高度経済成長の開始

1957
昭和32

日本プロゴルフ協会(PGA)創立
中村寅吉氏、第25回日本プロゴルフ選手権大会にて初優勝を果たす
第5回カナダ・カップ大会、霞ヶ関カンツリー倶楽部にて開催
中村寅吉氏、小野光一氏の日本チームが団体優勝、中村寅吉氏が個人優勝を果たす

1958
昭和33

日本ゴルフ協会(JGA)、世界アマチュアゴルフ評論会(WAGC)(現、国際ゴルフ連盟)に加盟

1961
昭和36

日本女子ゴルフ同好会競技大会、東雲ゴルフ場(東京・晴海)にて開催される

1962
昭和37

第3回世界アマチュアゴルフチーム選手権が川奈・富士で開催され、アメリカが優勝を果たす

1963
昭和38

第1回アジア太平洋アマチュアゴルフチーム選手権がフィリピンで開催され、日本が優勝を果たす

1964 東海道新幹線が開業

1967
昭和42

日本プロゴルフ協会(PGA)、女子のプロテストを実施する
「日本プロゴルフ協会女子部」として、初めて女性にプロフェッショナルとしての門戸を開くことになる

1967 樋口久子氏、第1期女子プロテストに合格

1968
昭和43

第1回日本女子プロゴルフ選手権大会、静岡県の天城カントリー倶楽部にて開催

1968 樋口久子氏、日本女子プロゴルフ選手権大会、TBS女子オープン選手権(現、日本女子オープンゴルフ選手権競技)の2大メジャーを連覇。以降、日本女子プロゴルフ選手権大会7連覇、TBS女子オープン選手権4連覇を果たす

1969
昭和44

日本ゴルフ協会(JGA)は会則を改め、関東、関西両地区連盟を下部組織にする組織案を承認
関東、関西両地区連盟が日本ゴルフ協会(JGA)に加盟する形で新組織が発足

1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸

1970 樋口久子氏、JGP女子オープンにて初優勝。以降、4連覇を果たす

1971
昭和46

尾崎将司氏、第39回日本プロゴルフ選手権大会にて初優勝を果たす
TBS女子オープン選手権の主権がTBSから日本ゴルフ協会の手に移り、日本女子オープンゴルフ選手権競技に改称

1972
昭和47

佐々木マサ子氏、日本女子オープンゴルフ選手権競技にて初優勝

1973
昭和48

日本ゴルフ協会(JGA)、日本体育協会の加盟団体から退会
青木功氏、第41回日本プロゴルフ選手権大会にて初優勝を果たす
尾崎将司氏、青木功氏が活躍し、「AO時代」を迎える

1973 オイルショックが始まる

1974
昭和49

日本プロゴルフ協会(PGA)から独立し、日本女子プロゴルフ協会(LPGA)が発足
初代会長には中村寅吉氏が就任し、年間18試合、賞金総額が1億円を超える規模となる

1976 ロッキード事件が表面化

1977
昭和52

岡本綾子氏、欧米で通算18勝を挙げる

<p>1987 昭和62</p> <p>1988 昭和63</p> <p>1991 平成3</p> <p>1992 平成4</p> <p>1997 平成9</p> <p>1999 平成11</p> <p>2001 平成13</p> <p>2002 平成14</p> <p>2003 平成15</p>	<p>1977 樋口久子氏、全米女子プロゴルフ選手権にて日本人として初優勝を果たす</p> <p>1978 日中平和友好条約を調印</p> <p>1982 東北、上越新幹線が開業</p> <p>日本ゴルフ協会(JGA)、文部省(現、文部科学省)から財団法人設立許可を受ける</p> <p>普通会員(現、個人会員制度)・ジュニア会員制度・賛助会員制度が発足</p> <p>尾崎将司氏、第59回日本プロゴルフ選手権大会にて、国内最少タイ記録11アンダー61で2位に6打差をつけて逆転優勝 日本プロ4勝の至上最多記録とともに、日本男子プロ初の通算70勝を記録</p> <p>日本ゴルフ協会(JGA)、日本体育協会に復帰加盟するとともに、体協会員制度(現、都道府県ゴルフ競技団体会員制度)を発足</p> <p>1995 阪神・淡路大震災が発生</p> <p>1996 樋口久子氏、日本女子プロゴルフ協会(JLPGA)会長に就任</p> <p>丸山茂樹氏、第65回日本プロゴルフ選手権大会にて初優勝を果たす</p> <p>1997 樋口久子氏、会長職専任のため競技の第一線を退く。優勝回数72回は日本歴代女子最多記録</p> <p>1997 香港が中国に返還される</p> <p>1998 樋口久子氏、日本プロスポーツ功労賞を受賞</p> <p>ゴルフが国民体育大会の正式競技となる</p> <p>1901年を日本ゴルフ元年とし、日本ゴルフ100周年記念レセプションを開催</p> <p>ゴルフ場利用税の一部改正が実現し、翌年4月から身体障害者、18歳未満のゴルファー、70歳以上のゴルファーなどが非課税となる</p> <p>片山晋呉氏、第71回日本プロゴルフ選手権大会にて初優勝を果たす</p>	<p>2003 樋口久子氏、日本人初の世界ゴルフ殿堂入りを果たす</p> <p>2004 平成16</p> <p>2005 平成17</p> <p>2007 平成19</p> <p>2008 平成20</p> <p>2009 平成21</p> <p>2010 平成22</p> <p>2011 樋口久子氏、日本プロスポーツ功労賞を受賞 樋口久子氏、日本女子プロゴルフ協会(JLPGA)会長を退任し、相談役に就任</p> <p>2011 東日本大震災が発生</p> <p>2012 平成24</p> <p>2013 樋口久子氏、日本プロゴルフ殿堂入りを果たす</p> <p>2014 樋口久子氏、ゴルフ界から初めて文化功労者に選出</p> <p>不動裕理氏、日本女子オープンゴルフ選手権競技にて初優勝</p> <p>宮里藍氏、日本女子オープンゴルフ選手権競技にて、大会史上最年少20歳3ヶ月で初優勝を果たす</p> <p>石川遼氏、国内男子ツアー初出場となったマンシングウェアオープンKSBカップにて、大会史上最年少15歳8ヶ月で初優勝を果たす 諸見里しのぶ氏、日本女子オープンゴルフ選手権競技にて初優勝</p> <p>片山晋呉氏、第76回日本プロゴルフ選手権大会にて、連日60台を連発してスコアを伸ばし通算23アンダー265で優勝 日本プロの大会レコード最多アンダー数を記録</p> <p>2008 リーマンショックが起こる</p> <p>国際オリンピック委員会(IOC)総会にて、2016年開催のリオデジャネイロオリンピックの実施競技に、ゴルフが採用されることが決定</p> <p>石川遼氏、中日クラウンズにて優勝 最終日にマークしたスコア58が「世界最少ストローク」としてギネスブックに認定される 国際ゴルフ連盟(IGF)総会にて、2014年世界アマチュアゴルフチーム選手権が52年ぶりに日本で開催されることが決定</p> <p>横峯さくら氏、生涯獲得賞金8億円を最年少記録となる26歳194日で達成</p>
---	---	--



高校生時代(左) クラスメイトと共に



成人式(川越カントリークラブで)



USAからの帰国後第1戦、
日本女子プロ選手権で優勝。左は岡本



師・中村寅吉プロと



アメリカツアーに参加していたころ。右は佐々木マサ子



1964年 東京オリンピック開会式



1976年 ワールド22



ゴルフ場



1968年 川越カントリークラブで練習に励む



日本女子オープンを連覇(TBS越谷GC)



1977年 日本女子オープン



1976年 コルゲート・ヨーロッパ・オープン



グリーン上でのパッティング



1988年2月 愛娘久仁子ちゃんを出産



日本女子オープンを連覇(TBS越谷GC) 表彰式



1977年 全米女子プロ選手権



海外ツアーで活躍



1977年 全米女子プロ選手権



子供たちがスポーツを楽しむ



殿堂入りを果たす



樋口久子